

経済産業大臣賞（優秀賞）

美しい生命の水を守るために

徳島県 鳴門教育大学附属中学校 三年 山根 綾華

春には、川面にあたたかな光を届け、夏には、香り豊かな鮎が食卓を飾り、秋には、土手のススキに風情を感じ、冬には、乾いた川原がどこか物悲しさを醸し出す、我が徳島県が誇る清流、吉野川。

私は、生まれた時から吉野川を見て育ち、その恩恵に預かり、現在に至る。県外から訪れた人は、吉野川の川幅や、まるで海かと思紛う水量の豊かさに圧倒されることが多いそうだ。そんな時、私は少し誇らしい気持ちになる。橋の上から吉野川を眺めると、魚が元氣よく飛び跳ね、昔、春になると家族でしじみを探りに行ったことを懐かしく思い出す。

徳島県には、吉野川をはじめ、那賀川、勝浦川、穴吹川、新町川と、それぞれの地域に密着した川の役割を果たしている。例えば、清流穴吹川では、その水の清らかさに、涼を求め、キャンプや川遊びを楽しむ人々が年間多数訪れる。また、徳島市のシンボルとも言える新町川では、市の中心を流れる観光スポットとして、大きな存在感を与えている。私は、毎日通学途中に眺めるこの川が身近すぎて、きれいな川というのが当たり前に思っていたが、今回、徳島県の河川についてインターネットで調べたり、家族に話を聞いたりして、かつて新町川は工場や家庭の排水で汚染が進み、魚が住めないような「死の川」と呼ばれていたことを知り、大きな衝撃を受けた。阿波踊りの時期になると街を彩る提灯が川面に映え風流な趣を感じさせ、また、新町川沿いはおしゃれなイメージがある。だが、まさか、そんな大好きな川が父母が幼い頃には今の私が見る新町川とのイメージが大きく違っていたことに驚いた。しかし、数十年の間に、こんなにきれいな川に生まれ変わったことに、川を甦らせた方々の熱い情熱と努力に感動を覚えた。

蛇口をひねれば、当たり前においしく、安全な水が出てくるのも、たくさんの人々の支えがあることを知った。そして、改めて水の大切さを感じ、守っていくことの重要性を認識した。

ところが、昨年の夏、恵みを与えてくれる河川も、私たちに牙を向く恐ろしさを痛感した。台風による豪雨では、川が氾濫し、ある中学校の校舎の一階部分が全て浸かり、コンビニはその看板だけが水面から顔を出していた。増大する自然災害と人がどう向き合うか、自然と共存していく対処策を再考する時期が来ているのではないだろうか。学校での環境についての学習や、エコ活動に対する取り組みなど、自然との関わりについて、自分なりに知識を深めてきた。だが、急激に迫る温暖化、自然災害への対策を考えることが、私たちにとって“大切な水”を守ることにつながっていくと考える。

私の曾祖母が若い頃には、頑丈な橋がなく台風の度に川が氾濫し、上流から木々や岩石が流れ、荒れ狂う水は潜水橋を越え、精魂込めて育てた作物を無残に流し、また一からの田畑作り。でも台風が去った後には、流木を集め燃料にしたり、川と共存しながら過ごしてきた日々を目を細め、話してくれた。

私は、今こそ水を大切にして、人々のかけがえのない生命や財産を守りたい。私たちの生活を豊かにしてくれる工業や農業用水の整備の拡充、環境に配慮した水力発電の活用など、環境と人とのつながりを真剣に考え、取り組んでいきたいと思う。

我が家でも、雨水を貯めてガーデンングに利用したり、油や汚れた食器は新聞紙で拭いてから洗ったり、洗剤は植物性の製品を選んでいく。一人の力はとても小さいが、一人一人の心がけが大きな力になることを私は信じている。限りある資源は、一度破壊されてしまうと、なかなか元通りには戻らない。美しい生命の水は私たちが守る。さあ、そのアクションをまず私からスタートしていきたい。